

前世で **不遇** すぎた

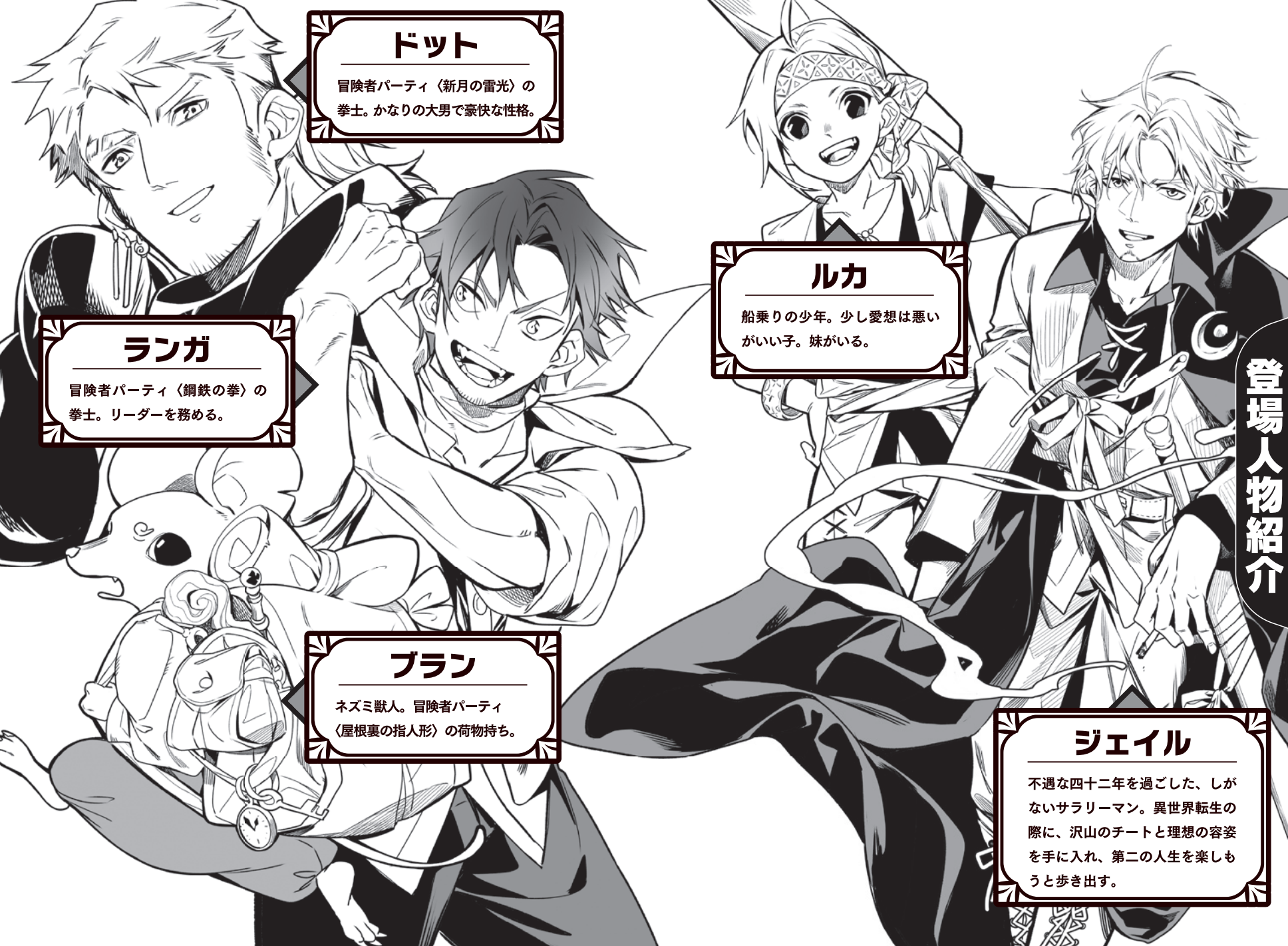
ZENSE DE FUGU SUGITA OSSAN, MEGAMI NI
AWAREMARETE CHEAT MORATTA NODE
SUKI NI IKITE MIRU

おっさん、
女神に憐れまれてチート貰ったので
好きに生きてみる

vol. **2**

著 **紫楼** Shirou

ill. ほろば夏弥



ドット

冒険者パーティ〈新月の雷光〉の
拳士。かなりの大男で豪快な性格。

ランガ

冒険者パーティ〈鋼鉄の拳〉の
拳士。リーダーを務める。

ブラン

ネズミ獣人。冒険者パーティ
〈屋根裏の指人形〉の荷物持ち。

ルカ

船乗りの少年。少し愛想は悪い
がいい子。妹がいる。

ジェイル

不遇な四十二年を過ごした、しが
ないサラリーマン。異世界転生の
際に、沢山のチートと理想の容姿
を手に入れ、第二の人生を楽しも
うと歩き出す。

登場人物紹介

一章 この世界でも社畜？

上司に恵まれず、初めてできた彼女のアンナには財布としてしか見られず、不遇な四十二年を過ごしてきたサラリーマンの俺——一ノ瀬成。その上、不運にも事故に巻き込まれ命を落としたのだ……なんと俺の悲惨な人生を憐れんだ女神が、望んだチートを授けて異世界に転生させてくれた。しかも、理想の姿も手に入れて。

そして、まずはカナンという町にたどり着いた俺は、冒険者として生きていくことにした。やがて、《鋼鉄の拳》と《新月の雷光》という二つの冒険者パーティの面々とも知り合い、にぎやかで楽しい日々を送っている——

この世界で生きていくと決意を新たにした俺は、昨日までの自分より少しいい男になった……なんてな。そんなことはない。ただ気ままな旅を楽しむぞってだけの話だ。特に変わりようがない。とりあえず、旅の仕度をしようと思い出しに……と思ったのだが、ユニークスキルの《ネットショッピング》でなんでも買えちゃうからなあ。

人目のあるところで食べる用に少しだけ買っておくか。まずはワインを数袋分、買っておく。さらに食料品店を何軒かぶらぶらと回っていたら、《鋼鉄の拳》のヤンに声を掛けられた。

「あー、いたあ！」

「へ？」

ガシツと肩を掴まれて、そのまま冒険者ギルドに連れ込まれた。

ギルドが混雑する中、引きずられ気味に二階のギルマスの部屋に。痛いって。

「おー、来たか、ジェイル」

「ん、みんなに連絡」

ギルマスに続き、ソファでお茶を飲んでいた〈新月の雷光〉の魔導士シャートが、小粒の魔力をいくつか窓の外に飛ばした。

「ギルマス、いったい何？」

「ああ、お前、ポルドスに行くって言ってただろ？」

「ああ……」

ニヤリと笑うギルマスを見て、嫌な予感がする。

「ついだから〈新月の雷光〉と〈鋼鉄の拳〉と一緒にポルドスでの緊急依頼に参加してくれ」

「はあ？」

なんの依頼かわからないけど、何もついでじゃない。

Bランクパーティ二組が参加するなら、俺って必要ないよな？

「ちなみに強制依頼だ。お貴族さま案件だからな。ペーペーは断れないぞー」

何その案件。詳しく聞くと、王都からポルドスまでバカンスに来ていた侯爵家の子供二人が攫さらわ

れたらしく、子供の搜索と発見した場合は王都まで護衛をするんだって。

「カナンからBランクを二組も出していいのか？」

「よかあない。本来、人攫いの犯人が個人か集団かで対応が違う。が、どっちかはまだわかっていねえ。他にも見た目のいい子どもが数人消えているから、集団の可能性のほうで対策する」

ポルドスにもそれなりの人数の冒険者がいるが、事が大きいからすでに総動員。

しかも、侯爵家の人たちが仕事でポルドスに残れないんだと。念のために侯爵家の移動に護衛を増やして同行させる。

侯爵家には当然、護衛騎士がいて、さらに王都から連れてきている冒険者たちもいる。ただ、犯人の目的がわからないため、侯爵家の護まもりを増やしたほうがいいとポルドスのギルドマスターが判断して、王都への帰還のためにAランクパーティを付けたってさ。

ポルドスの冒険者たちには、予測される逃亡ルートをしらみ潰つぶしに探索させ、同時に街の警戒もさせておりまったく人が足りず、近隣のギルドからも応援を呼んでいる状況らしい。

「ポルドスで子供が見つかったら、俺は依頼達成か？」

とつとと終わらせて、海沿いをバイクでかつ飛ばしたり、釣りをしたりするんだ、俺は。

「んなわけには行くか。〈鋼鉄の拳〉はこっちに帰ってきてもらうが、お貴族さまの令息と令嬢の護衛は〈新月の雷光〉とお前に任せる」

えー……ヤダ。子供が一緒にタバコ吸えないし。それ以前に、飯や風呂とか気ままにヘルム——スキル〈無限収納むげんしゅうのう〉に入っている俺の部屋——に入れないじゃん。絶対にイヤだ。

「はあ？ そんなのポルドスの冒険者でもいいだろ？」

「どうせ旅をするんだらう？」

ギルマスがついでに稼げてお得だって言う。

一人で気ままに動くのと団体ツアーは違うだろうが。俺は稼ぎより自由が欲しい。

「ポルドスから王都まで何日だよ……」

「子連れだと二ヶ月かなあ？」

シャートが少し脳内で計算したそぶりで答えてくれた。

「お断りしたい」

二ヶ月も拘束されたら自由にできない。

「ギルド員なら諦めろ」

ぐぬぬ。身分証がなかったばかりに。

あんなにいろいろチートを買ったのに、身分証を貰い損ねたばかりに……

ドカドカと下から音がして、ドットたち〈新月の雷光〉や〈鋼鉄の拳〉の面々が二階に上がってきた。

「お、いたあ」

「ジェイル、どこ行ってたんだよ」

〈新月の雷光〉のドレイクが少し汗をかいている。そんなに走り回ったのか……

「そんな目立つツラしておいて目撃情報が皆無って、どういうこった」

おお、時空神シャルマに貰った〈隠者の指輪〉がすごいっぽいぞ。

「で？ 説明は済んだのか？」

ドットがギルマスに聞きつつ、俺を見る。

「嫌なんだけど」

即座に言葉に出してしまったけど、往生際が悪い。

でもなあ、いくらいいやつらでも、移動中ずっと一緒は嫌だ。

「なあに言ってるやがる。俺たちだけで王都まで付き添ったら、小さいお貴族さまが可哀想だろう？
ちつとでも貴族っぽい綺麗なツラのがいたほうが安心だろうが」

ギルマスは許してくれない。

「女冒険者とかいるじゃん。それに、獣人だとより子供に喜ばれるんじゃないの？」

俺ならそれがいい。可愛い女の子ともふもふ。絶対それがいい。

「バッカ！ お前、女冒険者が何ヶ月もオッサンパーティに付き合うわけねえだろうが」

〈鋼鉄の拳〉のリーダー、ランガがそう言うけど、強制依頼とかお金を上乗せとかしたらいいじゃん！ しかも「Bランクとお近付き！」的な……のがきたら逆にダメか……？

「それにな、ジェイル、貴族は獣人をそばに置かないんだぞ」

「えー」

人種差別反対。モフ毛があるって素晴らしいじゃんか。

「そういうわけだから、今から十日分の食材と必要なもん買って、二時間後にへ小鳥の止まり木へに集合ねー」

今日出ていくの!? さっきの買い物だけじゃ足りないかなあ。

「ちなみに……ポルドスに現地集合というのは？」

まだ抵抗してみる。馬車移動は嫌だ。徒歩も嫌だし、ダッシュで走るのも嫌だ。トイレと風呂が使えないのも嫌だ。最悪だ。贅沢^{ぜいたく}を言ってるのはわかってる。でも持つてるものを使いたいんだよー。

「ダメに決まってるんだろ。盗賊や人攫い一味が囓^かんでるなら、すでに街を出ている。カナンからポルドスの間で見つかるかもしれないだろうが」

ギルマスたちに呆^{あき}れられて……怒られた。

ポルドス停泊の船中や、ポルドスからガジャル、ポルドスからドランと道のないような森治いも全方位搜索中らしい。かなりのことだ。

「……」

海の神オーズ、教会か神殿に行けなかったらごめん。

とりあえず、それぞれ買い出しに行くらしいので、俺も一応何か買い足しに行くことにした。

でもさあ、何を買おう……

《新月の雷光》と《鋼鉄の拳》たちと一緒に行動することになったから、一人旅以上に気を付けて、この世界の食材とか道具を持っていかないと。

……二ヶ月もかかるなら、絶対に途中で米が食いたくなるし、ラーメンやハンバーガーも食いたいだろ。あ、ポルドスまでは違うか。食事を十日分って言ってたから、それくらいの予定か。

みんなで食事している時に俺だけ違うものを食うとかはナシだし……どうするんだ、これ。

大人なら我慢しろーとは思うぞ。でも俺は我慢しないって決めたんだよ。

この世界で過ごすって決めて、いい見てくれになつてさ、魔法で好きなことができるって言われたんだぞ。そりゃマイウェイでいくさ。神様たちだつてフリーダムなんだしさ。

さっき買った分では、人前で食べるとしたら数日分しかない。仕方ないのでハードパンや小麦、肉と果物をたくさん買った。

ドットたちはまともに料理しないだろう。俺がなんだかんだ作ることになるから、金物屋で鉄板と大きめの鍋なんかをいろいろ買ってみた。

パンは人前で作れなくても、ピザ生地を焼くくらいなら……してもいいよな？

薬屋に寄って、ポーションを追加で購入して。葉巻を二本買った。葉巻は各地で味が違うってことで、いつか比べられるように、一応予備な。

「ねえ、髪を染めるものってある？ それと、あるなら何色にできる？」

薬屋のおじさんに声をかけた。

「真っ白にするか、黄緑色^{きみどりいろ}で染めるか」

棚から粉を出して説明をしてくれた。粉は脱色剤的なもので白くするか、草木染めみたいな染料しかないらしい。濃い色の髪に使ったら、濃い緑になるんだろうか。

それにしても、その二択しかないとは。とりあえず、突然青髪になるとかはダメってことだ。「そっか」

脱色するならブリーチを使えばいいよな。買わないでおこう。思っていたのと違うようだと思って店を出た。

買い物を済ませて路地裏に行き、すぐさま〈ヘルム〉に入った。唐突に強制依頼を受けさせられてイラついていたらしい。ドツと疲れた。地味にストレスが溜まっていたのを自覚する。

速攻でシガリ口を取り出し、口に咥えてソファに座った。

「ふうー」

スマホを出して〈ネットショッピング〉でブリーチをお取り寄せ〜って思ったら、神様からメールが来てた。

髪とか姿を変えたい時は女の子の変身シーンを思い出して、セリフを言ってみてね！

ゲームとカードのお礼よ。イメージしやすい魔法少女のセリフで試してみて☆

なぜ特撮ヒーロー番組じゃなく女の子なのか。

女神のフォルティナとメルティアが俺の反応を楽しんでるとしか思えない。

ちなみに、神たちが漁ったのは、俺の記憶の中だけじゃないようだ。

女の子向けアニメなんかは妹や姪っ子の付き合いで少ししか見たことがないからな。

無駄な抵抗かと思いつつ――

「変っ身っ！」

「チェンジ！」

とかやってみたけど、ダメだった。なぜ無駄な制限をつけるんだよ！ 無駄にポーズを取る、見た目はともかく、怪しいオッサンになったじゃん。

仕方なく、有名な制服の戦士の変身シーンを再現した。

すると、あつという間に髪の色が白く変わった。

これは、実際の髪の色が抜けたわけじゃなくて、変身したらしい。

魔法を解いたら、元の金髪に戻る。

鏡で確認すると、推しボーカルの彼が髪の色を抜いた時みたいになってるので満足。

イケメン、なんでも似合う。ちゃんと眉毛と睫毛も色が抜けていてよかった。下の毛は後で確認しよう。

時間がないので、タバコと炭酸水と水とブランデーとワインを適当にぼちぼち。

ベーキングパウダーも一応。ピタパンやピザなら、時間をかけずに用意できる。仕込みをする余裕があればやったんだけど、今日は無理かな……

あとは、我慢ができなかった時にクリームパン、メロンパン、カレーパン、あんぱん、焼きそ

ぱンとかもカートにぶつ込んだ。でも、その状況になった時に一人だけ食べるわけにもいかず、もし食べていたらいろいろ聞かれちゃうだろうし、スマホもうつかり出しちゃうかもしれないと思つてやめた。

「……旅の支度つて、あとはなんだ？」

寝袋は買つてあるし、ランタンもある。水分（ワイン）とパンは買ったし……

服は多分、移動中はあんまり着替えないよな……ありえねえ。冒険者つて下着はどうしてるんだ？ 洗わないのか？ 〈洗^{クリン}浄〉つてみんなできるのか？

ぐるぐる考えたら面倒になつてきた。

シャワーだけざつと浴びて、町で買つてきた服……一回洗濯したい。

〈洗^{クリン}浄〉を使えば綺麗になるけど、なんとなく一回は洗いたい。洗えるものは全部洗濯機に入れて乾燥までお任せにする。

着る服がなくなり、仕方ないので今着ている服と似たものをいくつか〈創^{さい}造^{ぞう}魔法〉で作った。見る用にウエストバッグも作つて。リュックもか。

アイテムボックス（〈無^む限^{げん}収^{しゆ}納〉だけど）持ちだつて知られてるから、適^{てき}当^{とう}なサイズでいいや。足りなかつたら途中で考えよう。

最後に缶ビールを飲んどこ。そのうちビールサーバーとかも買おうかな。

外の生命反応を確認してから路地裏に戻る。夕暮れ時だ。

〈小鳥の止まり木〉に戻ると、すでにランガたちが来ていて、この宿のおばちゃん——エンマさんに夕食を出してもらつて食べていた。

「坊や、おかえりい、あれえ？ 髪どうしたね！」

「ジエイル、遅かつたなあ！ ん？ 白髪？」

「何があつた!？」

出迎えてくれたエンマさんとランガやヴァロなど〈鋼鉄の拳〉の面々が、俺の髪の色に驚く。

「金髪が目立つみたいだから、ポルドスで目立たないように、薬屋の液体で色を抜いた」

サクツと説明したら、なんか可哀そうなイタいやつを見る目をされた。

「部屋に行つてくる」

視線は無視して、部屋に置きっぱなしにしていたマジックバッグに擬^ぎ態^{たい}させたウエストバッグを回収してから、また下に戻つた。

〈新月の雷光〉も部屋を片付けて降りてきた。彼らもマジックバッグ持ちでかなり身軽だ。

やっぱり髪のことを聞かれてしまう。説明をしたら、「いつもよりはマシか」つて言われてちよつとムカツとした。これでも一応周りに馴^な染^じもうと努力してるんだよ！

「坊やも貴^{あな}方^たたちも一緒に出ちゃうなんて寂^{さび}しくなるとねー」

エンマさんが本当に悲しそうで、胸がチクツと痛む。

「今回はちいと長いが、俺たちは戻ってくるから」

ランガがエンマさんをなぐさめる。

「そうだよ。ボルクさんのご飯が食べたいし、エンマさんに会いたいからね」
シャートが笑顔で言った。

みんな慌しく夕飯を食べて、出発時間になった。

「ジェイル、またこっちに来たら寄れ」

宿の主人のボルクさんが低い声で言う。無骨な人だが優しいことを知っている。別れるのが少し寂しい。

「そうとよ。顔を見せにくるとね」

エンマさんも言う。二人は程よい距離感で俺が居心地よく過ごせるよう接してくれた。

こっちの世界に来て初めて泊まった宿がここでもよかったと思う。

「一周、回ってくるよ」

「気を付けて行け」

「若いつていいとね」

ボルクさんは俺の背中を叩き、エンマさんは背伸びをしてハグしてくれた。

そして、みんなに二回分の弁当を用意して持たせてくれた。

「「「ありがとう」」」

「無事に戻ってくるとよ」

「「「ああ」」」

宿を出て東門に向かうと、冒険者ギルドが用意した幌馬車が二台停まっていた。御者付きだ。

ポルドスまで自力で爆走するのじゃなくてよかった。

でも、シャートが馬に〈俊足〉の付与魔法をかけた。馬が爆走……大丈夫かな。

夜間に町の外に出るのは少々危険らしいけど、Bランクパーティだから問題ないという。

「気を付けてな」

門番のワイドに送り出されて、俺たちは出発した。

四人ずつに分かれて馬車に乗っている。俺は〈鋼鉄の拳〉のパーティと一緒にの馬車だ。

馬車が勢いよく走り出して一時間もしないうちに、俺はぐったりした。

「おいおい、一人旅って今まで徒歩だったのか？」

「馬車に弱いつて、冒険者やんのキツくねえ？」

ランガとヴァロに「こいつマジかよ」って感じで突っ込まれている。

馬車は広めだけど、ギルドの依頼で荷物も積んでる。緊急依頼のついでに輸送の依頼も兼ねているのだ。Bランクパーティの護衛で荷物が運べてラッキー的な。急ぎなのに馬車を重くするのによつて思えるが、シャートの付与魔法があるので問題ないらしい。

ヤンは前方の警戒係として御者台に座っている。俺たちは荷台の後方担当だ。交代で外の様子を見張る。

馬には〈俊足〉、馬車には〈軽量〉の付与魔法がかかっている、かなり猛スピードだ。おそらく通常の馬車よりは揺れていないのかもしれない。

だが、舗装が甘い道、というか土を均した程度の道は、走ると轍や岩石とかでガタガタと揺れる。最初の十分くらいで俺の尾てい骨が悲鳴をあげて、三十分で馬車酔いがきた。骨が痛い……コロしてくれ……

馬の様子を見つつ、三時間おきくらいで休憩を取るらしいので、俺は最初の休憩まで隅っこに寝転がってやり過ごす。寝袋やマントを丸めて痛むところに敷いたけど、気持ち程度の和らぎだ。ランガたちも寝袋を尻に敷いてる。

せめて普通の馬車ならよかった。座席があるやつ。でも荷馬車や辻馬車なんかは、みんなこの板張りタイプらしい。この状態がずっと続くとか俺は泣くぞ。尻が爆発しそうだ。

今回の道中は付与魔法でスピードアップしてるから、順調に進めば、ポルドスに到着するのは三日後くらいだそう。馬は大丈夫なのか？

ランガたちは揺れる中で普通に皮袋のワインを飲んで……俺は今飲んだら吐くぞ。

一回目の休憩地に着いて、俺はまず「吐きたい」と言つて、ちよつと離れた場所に行った。トイレって言うと、連れションされそうだからな。

吐くまではいつてないのだけど、かなり気持ち悪い。スマホを出して、ペットボトルの水と酔い止めを〈ネットショッピング〉で買って飲んだ。

あの馬車の揺れはキツいと思い、ゲルマットのクッションタイプも十二個買った。自分の分と、他のみんなの分だ。

俺の分は三個分を繋げて折りたたみ式にして、マットレスになるようにしてみた。

みんなの分は、〈創造魔法〉でチャックなしで縫い目もなしのカバーを、ゲルマットをくるむように作った。中身は見るとなよってことな。

ついでに馬たちにおやつをあげようと、角砂糖と野菜と果物をポチッてみた。

「おーい、大丈夫か？」

「大丈夫」

心配して呼びに来てくれたヴァロとともに、馬車のそばに戻った。

「おー、顔色が戻ったな」

「マジで馬車酔いしたのか」

ランガに続き、別の馬車に乗っていたドットが言う。彼らも俺が調子を崩したことを聞いたらしい。

「お貴族さまの馬車よりは乗り心地悪いだろうがな」

俺をからかうドットの腰を叩いておく。もう貴族ネタはいんだよ。

「ほれ飲め」

そのドットから、木製カップで明らかに酸っぱい匂いのする飲み物を渡された。

匂い的には柑橘系か。断るのも悪いから飲んだ。超……激スッパ！

嘔き出しそうなのを我慢して腰をかがめてたら、〈新月の雷光〉のクレイバーとヴァロが大笑いだ。

「あつはは！ 強烈だけど効くからな！」

「……ありがとう」

ドットにカッパを〈洗浄〉してから返したら、何か言いたそうな顔をされたので、そしらぬふりをして離れた。ランガとヤンが馬車から離れたところでタバコを吸っていたので交ざる。

「ふー」

「おー、復活したな」

「ケツが痛いんだよ、ランガ」

骨が肉を突き破って出てきちゃいそう。

「肉が薄すぎんだよ。飯をちゃんと食え」

「鍛えろー」

と、やってきたドットが言う。

そりゃ、ランガとドットとクレイバーはマッチョだけど、他はちよつと鍛えてるなつて程度じゃん。シャートはわりと細身だし。

俺は、懂^{あこが}れのイケメンフェイスが似合う細マッチョくらいのボディでいたい……

「それよりお前の剣、変わってんなあ？」

ランガは、見栄えを洋風にした俺のかつこいい剣が気になったらしい。

この前、火と鍛治^{かじ}の神ヴェールに貰^たった太刀は、見た目からただものじゃない感が激しいから、いざという時に出すことにして、普段は仕舞つてある。今腰にあるのは最初に自分で作つたほうだ。

「そうそう、前から気になってたんだけどさ」

近寄つてきた剣士のドレイクが貸してつて言うので、嫌とも言えずに渡す。

「ほー？ 細いな。折れないのか？」

そこまで細くもないと思うぞ。代わりにドレイクは自分の剣を俺に見せてくれた。

大振りの洋剣だ。かなり使い込んでいるが、手入れがいい感じに見える。

「俺のはそこの剣よりは硬いと思うぞ」

ま、〈創造魔法〉とヴェールの手が入った、チートな神業^{かみわざ}で作られた剣だからな。滅多^{めった}なことでは折れないと思う。

「ほう！ ドワーフに作らせたのか？」

ドワーフ……やっぱりいるのか。いつかこの剣と太刀を見せびらかしに、どこかにあるドワーフの国に行かねばならぬらしいので、ちよつと大変なんだ。

想像だけど、ドワーフつてドットたちより暑苦しそう。

「いや……」

「なんだ？ 入手先は教えないタチか？」

「あー、ちよつと遠いから」

元を作ったのは俺でも、ヴェールの手が入っているものだから、どこにも売ってないし。

「おーい、そろそろ動くぞ」

ドットが言った。休憩はおしまいらしい。俺はドレイクにゲルマットを五枚渡す。

「クッションだ。みんなで使え」

そう言ったら、いつ用意したんだって言われた。そうなるよな。

「マジックバッグに仕舞い込んだの忘れてた」

「マジかよ」

呆れた顔には慣れたぞ。

「布を裂いて中を見ると、中身が爆発するから」

もちろん嘘^{ウソ}だけど。

「は？」

びっくりしているドレイクは放っておく。ランガたちと馬車に乗り、みんなにも配った。御者にも。

「中身を出そうとしたら爆発する」

ランガたちにもそう伝えたら、顔を引きつらせていたけど、中身を出そうとしなければいいんだよ。好奇心は身を滅^めぼすって言うだろ。

みんな恐々^{おそおそ}と触^ふつて、ゲルマットの感触とその柔^{やわ}らかさに驚き、そして尻に敷いてみて心地よさに感動したらしい。

「なんだあ？ こんな持ってたなら最初から使えばよかっただろう？」

「忘れてた」

……ヴァロにもものすごく残念な子を見ているような顔をされた。それから、ランガが口を開いた。
「んで、俺たちにも貸してくれるのか」

「あげる」

「ん？ 高いやつだろ？」

「……銀貨五枚くらい」

代金を払うって言われたけど、ドットたちにもさつき渡して何も貰ってないからと言うと、ランガにデコピンされた。

次の休憩地は野営用に整地されてる場所で、今日はそこに泊まるらしい。

みんなにゲルマットを三枚重ねて尻を守ってるのを爆笑されつつ、二時間後に休憩地についた。

ドットたちもゲルマットを使ってみて驚いたようで、俺の顔を見るなりゲンコツを落とした。そして、みんなからそれぞれ銀貨を五枚ずつ渡された。

「ペーペーから物を貰って金を渡さないとか、俺たちの立場がねえだろう」

「こんなすごいもんホイホイ出すな！」

ドットとランガがうるさい。

うぐぐ。俺のケツが大惨事になるよりいいだろう。自分のケツだけ守るとかできないし。みんなのケツを気にしてやったのに、酷い目にあったぞ。

休憩地は、街道の脇に整地されているだけの広場だ。そこにレンガで作られた窯^{かま}？ コの字型にレンガを積んであるだけって状態はなんて言うの？ それに、拾ってきたか持ってきたかした新^{たき}で火をおこしている。

調理をしたり、夜間の冷え対策に使ったりするらしい。コの字なのは、明かりが見えると獣が寄ってくるから、明かりを漏らさないように配慮したためだつて。

「交代で休むぞ」

ドットが言った。ちなみに、御者はしつかり休むため馬車の中で朝まで眠るんだそうだ。彼らは馬に水をやったり、飼い葉を与えたりしてから寝た。

「ジエイル、腹減つてねえか」

ランガが腹をさすっている。腹ペコらしい。

「あのクツションありがたかったぞ」

「慣れたと思つていたが、わりと痛かつたと気付いたよ」

ドレイクとヤンがクツションの感想を言ってきた。

飯より先に、とにかくタバコが吸いたいんだが。まだ自由になれないらしい。

ボルクさんが持たせてくれた弁当を食べて、ちよつとだけ水代わりのワインを飲んだ。

朝まで二時間交代で二人ずつ見張りするからと順番を決める。俺は初心者ということで、ランガと共に一番目の担当になった。

レンガ窯のそばに二人で座つた。見張りつてどうやるんだろうと思つたら、ランガがへ気配探^{けはいたん}知^ちができるからとりあえず起きていれればいいらしい。

「ふう……」

みんなが寝ると、ランガと二人で一服だ。

「あー、うめえ」

ランガがものすごく深くため息をつく。

「馬車じゃ吸わないんだな」

「あん？ そりゃ、灰が落ちたら危ねえだろうが」

ヤンもヴァロもタバコを吸うのに、馬車の中では誰も吸っていないかった。

確かに急な揺れが起きたら少し危ないかな。薬屋で買った自分で巻くやつなんかは危なそう。

「なんだ、馬車でも吸いたかつたのか？」

「少し……ケツが痛い間はそんな余裕なかつたけどな」

「お前、わけわからねえよな。身分証なしで旅してるとか言うし、冒険者になつたらなつたで簡単に大物を倒してくるし」

ランガがゲタゲタと笑う。

「こんなうめえブツ、ぜつてえ高いのにふっかけねえし、気軽にバンバン吸ってるしな」

商売していればばつたくる方向もアリなんだろうが、神様に貰つたスキルでばつたくるつてのはあんまりよろしくないよな。ランガたちがくれる金額は十分ばつたくり価格とは思っているけど。

「ついでに教えておいてやるが、お前、前の金髪より今のがヤベエぞ」

ふあ!? 衝撃の事実だ。

「なんで……」

「白髪は珍しくはねえが、お前は見た目がいいし、清潔感があつて、育ちもよさそうで、髪が綺

麗だ」

そんな褒めるなよって返す霧^{ふん}囲^い気^きじゃないな。

「煌^{きら}めく白い髪と品のよさで、神秘的すぎて高位の神官のようだ」
「なんでやねーん！」

「どうすれば目立たないんだよ」

見た目がいいのは仕方ない。そうありたいと願った結果だ。

「まず、こちらの平民の髪からはいい匂いなんぞせん」

髪の匂いだと!? シャンプーのハエールSの香りか……なんてことだ。無香料にすべきだったのか。

「……何が正解なんだ」

黄緑色の染料を選ぶべきだったのか。

「別に不正解でもないがなあ、お前は何しても素^すつ頓^{とん}狂^{きやう}だ」

「なんでだよ。もう何をどうすればいいのか……?」

「まあなあ……冒険者なんぞピンからキリまで色んなヤツがいる。お前みたいなのがいてもいいんだがなあ、なんか心配になる」

心配してくれつつも、言いたい放題に言われてるぞ。

「んー。じゃ、白いままはダメなんだな?」

金髪は貴族に見えると言われ、白髪は神秘的って……

「戻しても無駄じゃね。金髪とそう変わらんだろう?」

「変わんねえのかよ!? あー……もう。」

ここですぐ金髪に戻しても、結局はランガたちへの説明が面倒くさいので、この依頼が済んで一人になったら考えよう。

「ほれ、これ飲め」

ランガが、火にかけていた鍋からカップに注いだ物をくれた。

ホットワイン的な? サンテリアだっけ。スパイスハーブと乾燥した果実で作ってくれたようだ。

寒いってほどではないけど、温まる飲み物はうれしい。

「ありがとう」

「これ飲んでけば、よく寝れるぞ」

結局、ランガたちはかなり世話好きで優しいんだよな。

「あ、明日の仕込みしていい?」

「仕込み?」

薄いパンを焼いて食べたい旨を伝えると、妙な顔をされたけど、OKだった。

ティーブルがないので、温めていない鉄板の上でやるしかない。大麦粉と小麦粉をたっぷり出して、こつそりベーキングパウダーと砂糖と塩を混ぜて、水は竹筒に移しておいたものから……かなりちまちまとした作業だ。

ランガとしょーもない話をしながら二時間、たくさん捏^こねた。



十人分……三日くらいは持つか？ いや、いくらなんでもこれだけあれば余裕かな。

次の見張りをシャートとクレイバーに交代する時間になった。

俺とランガは、御者たちが乗っていない、もう一台の馬車に戻って寝る。

ゲルマツトクッションを広げて簡易マツトレスにしてから、フードマントを被って寝る準備を整える。

寝袋は襲撃時にすぐ動けないと困るから使わないと教えられた。いつ使うんだと思ったら、ダンジョンのセーフポイントやセーフゾーンとか、絶対に安心な場所であって。

他の人間がいたら危なくないか？ とちよつと思つた。人間のほうが怖い説。

「お前、それいいなあ」

ランガがゲルマツトのマツトレスを羨ましがった。

「あげない」

どうしても言うなら、またこっそりトイレとかへ逃げたときに買い足しておくからね。

……横になってすぐに寝れた。俺はわりとどこでも寝れるほうだ。

結局この晩は何事もなく、朝食タイムまでぐっすり寝た。

……何事もなく？ 思わず首をかしげたくなる。

起きたら、なんか大きなボアが一頭と穴ウサギが三頭、馬車の横にドーンと並んでいた。

ランガはそれを見ていい笑顔になった。この程度の獲物だと、出てきてもBランクの冒険者には

『肉が自分から来たぞ！ ラッキー!!』程度の出来事なのかも。

「おっす」

「いやー、ちょっと食ったわ」

朝方に見張りをしていたヤンとヴァロが、焼いた肉をかじっていた。

別に自分たちで狩ったものだし、いいんじゃない。

みんなが肉と乾パン^{かん}みたいな保存食を食べるようだったので、俺は夜間に仕込んだ生地でピタパンを焼いた。乾パンは一応買ってきてあるけど、歯と顎^{あご}に厳しすぎる。

ヤンが分けてくれた新鮮な肉を焼いて、〈無限収納〉から野菜を出して挟む。

「朝から手間じゃないか」

ちよつと焼くだけだから大した手間じゃないんだがな。

俺の様子を見ていたみんなに食べるか聞けば「欲しい」と言うので、みんなの分を焼いた。

「あれがこうなるのか？」

ランガは物珍しそうに俺の手元をずっと観察していた。

「野菜はいらんぞ」

「肉だけでいい」

ドレイクとヤンに小学生男子みたいなことを言われつつ作って、朝食を済ませた。

あーあ……食後のコーヒーが飲みたいな。

出発の準備が整って、休憩地を出る。

まだ二日目だから我慢するけど、やっぱり服は着替えないんだなあ。

進んで行く道は一応整備はされていて、数軒の家がある程度の小さな集落がポツポツ見える。

酪農業^{らくのうぎよう}や林業……の人？ たちの集落らしい。

カナンの町を出てポルドスの街までの、ちょうど半分くらいの場所までが、カナンの領主カリュド伯爵の領地だそう。

来た道、ほぼ未開発な森林地帯って感じだけど、儲^{もろ}かっているのかね。

約三時間後。今のところ出てきたのがオオカミくらいで、平穏な旅だ。

ケツはだいぶマシになったものの、馬車酔いがひどくて、コソコソと酔い止めを飲んでやり過ぎてきた。乗り物は平気なほうだったけど、これはキツイ。揺れる頻度^{ひんどう}が多いからかな。

二回目の休憩で昼飯タイムとなる。みんながボルクさんの弁当を食べるので、俺もそうした。

早めに食ってトイレと言いつつ、少し離れてから自分に〈洗浄〉をかけた。魔法で全身と衣装も綺麗になるから、髪の毛も残らないはず。

水分がアルコールだけなのも慣れないから、ペットボトルの水を飲んでおいた。

シガリ口を咥えながら戻ろうとしたら、穴ウサギが出たので短銃でドンツとな。

短銃は見られないようにウエストバッグに入れるふりで〈無限収納〉に入れている。

すぐに戻らなくちゃなので、穴ウサギも収納しておこう。お任せすれば勝手に解体されるし。

第二章 料理と酒

休憩場に戻れば、ランガたちがシガリロを吸ってた。

……なんか、老け顔の高校生がコンビ二前でヤンキー座りしている幻影が見えたぞ。

「どこまでクソしに行ってるのさー」

ランガにはデリカシーがない……今後の休憩で毎回これを言われるのかな。だがコソコソとタバコ休憩もろもろをするためには、仕方ないので甘んじて受けよう。

「蛇出なかったかー？」

やだ！ トイレ中に蛇が出たら叫びそう。

でも、いざとなったらウオッチが〈危険察知〉を通知してくれるから多分大丈夫。

馬にオヤツあげたいと御者に聞いてみたら、少しだけならと言われたので角砂糖一つずつあげた。生野菜はお腹を壊すかなとか思ってた角砂糖にしたんだけど、四頭の馬たちが「ブヒヒン♪」とご機嫌になったのでよかったな。

ただ、御者は俺が何をあげたか気になったようだ。

「それはいつたい？」

「砂糖」

「「「ハアーーーーー!」」」」

御者だけじゃなく、みんなに驚愕された。

ネットで馬が角砂糖を食べて喜んでいた動画を見たことがあるから、好きだと思ったんだよ。

「おまえはっ!! アホかー!」

ドットにゲンコツドリルされた。

「人間でも気軽に食えねえのを気軽にやるな!」

あ、しまった。砂糖がおいしいんだった。

「馬が味を覚えちゃったら可哀想だろー」

クレイバーにもヤンにも怒られた。そっか。そこまでの品だったか。

「ごめんなさい」

馬さん、ごめんな。でも、お詫びにテンサイの種とか御者に渡したらもっと怒るよな？

やっちゃったもんは仕方ないと割り切ってくれたので出発だ。馬はご機嫌だった。

「ジェイルのぶっ飛び具合を舐めてたわ」とランガに呆れられ、「砂糖の塊とか意味わかんねえ」とクレイバーに苦笑された。

「そういうやボルクさんにいきなり高級酒を鍋にぶっ込んだって聞いたぞー」

馬車の中でランガたちにめっちゃ笑われて、頭をグリグリされる。

「ボルクさんがお前をしつかり見張れって言ってたのこれかあ」

ボルクさん、ランガに何を頼んじゃってるの。

「ギルマスにも頼まれたー」

「気を付けようがねえぞ」

ランガとクレイバーに追いうちをかけられる。

ぐっ！ この依頼参加は、俺に常識を教えるためのギルマスの優しさか。カナンって、俺にとつてチュートリアル的な、全てが優しい町だったな。落第点で追試を受けてる気分だけど。

「前に鍋に入れた高級酒つてさあ、スキットルの中身を全部入れたんだろ？ もったいねえ！ あの肉は確かに美味かったけどなあ」

あ、酔っ払って訳がわからないだろう時間に出たのに、ランガはすっかり味を覚えてた！

「お前、クサみたいに、酒も山ほど持ってるのか？」

え、これって正直に言っているの？ ボロ出さないかチェック？

逃げられない馬車の中で酒に飢えたマツチョたちに絡まれた俺、泣く。

「あるようなないような……」

「なんだよ、それー」

「あるなら売ってくれ」

ランガとヤンが言う。〈鋼鉄の拳〉との初対面の日の場面、再び。

俺はウエストバッグの中を漁って、中身が残ってる三本のうち一本を出す。

何が出るかな？ 何が出るかな？ って、手に取ったのは、よりもよってワインですわー！

これを飲んじゃったら、この世界のワインに絶望しそうでヤバイよー。

「えっと売りたいくない……かな？」

「クサはいいのに酒は嫌ってか？」

「そんな出し惜しみするほどいい酒なの!?」

キラキラ目のヴァロとギラギラ目のランガに迫られる。ヤンも同じだ。

「うーん？ あとで文句を言わないか？」

「言わん！」

絶対だからな。

スキットルを出して渡すと、三人でカードゲームを始めた。なぜだと思えば、量が少ないからヒトリジメで飲むための勝負だつて。仲よく一口ずつ飲めばいいじゃん。

カードは数字が十までのもので、見ているうちにポーカーみたいなゲームだとわかった。

「やったー！」

勝利の雄叫びはヤンがあげた。

「よし！ ジェイル、いくらで売ってくれる!?」

えー……

「空になったスキットル返してくれるなら、銀貨一枚でいいよ」

宿では、カップ一杯が銅貨五枚程度だったはず。

「そんな安くていいのか!？」

ヤンがご機嫌で銀貨を一枚俺に渡してから、スキットルを口に突っ込んだ。
最初の一口をゴクリと嚥下して……

バターン！ あぐらで座っていたヤンが、上半身を倒して泣きはじめた。

ええええええええええええええええ！

「俺は今まで何を飲んでいたんだよおお」

「そんなにか！」

「飲みたかったー！」

ランガとヴァロが悔しがる。だから、一口ずつ分けて飲めばよかったじゃん。

次に馬車が止まるまで、ヤンはチビチビ飲みながら夢見心地で、ランガとヴァロはスキトルから出る香りを必死に嗅いでいた……酒はまだあるけど出すの怖いよな。

夕刻過ぎに牧場に着いた。

カナンとポルドス間で屋内で泊まれるのは、こういった牧場内に宿を営んでいるところだけ。今までに通りすぎた牧場や林業の工場も、通常のスピードで進む時なら泊まるらしい。

今夜の寢床は山小屋みたいな建物だ。

本来、酪農や林業で手一杯で、宿なんかやる暇ないのだけど、街道沿いに泊まれる場所がないと困る。野宿は野盗や獣に狙われやすいから、魔物避けを設置してある牧場内に、領主が簡易宿を設置させているそうだ。

その代わり領主の予算で、定期的に警邏隊けいらたいや冒険者が近辺を一掃しに来るのだとか。

出迎えてくれた牧場主に、御者が宿泊代をまとめて出してくれた。ギルドの経費らしい。

雜魚寢部屋で宿泊料銀貨一枚、素泊まり。一人部屋の場合は、金貨一枚で夕食付き。

今回俺たちは雑魚寝部屋だ。

ランガたちもドットたちもBランクなのに、一人部屋にしてもらえないのか。

「なんもないとこですけん、これだけですけども、どうぞお

素朴な牧場主はニコニコと挨拶をしてチーズをくれた。牧場チーズだ。

「「「あざーつす」」」

宿の鍵を開けてくれて、あとはお好きに使ってくださいって。大雑把だけど、気楽でいいな。

牧場主が帰っていったホツと一息つくと思ったら、ヤンの様子がおかしいとドットたちに言わ

れてしまった。ヤンはフラフラと夢見心地のままだ。

俺から酒を買ったことがバレたら困るランガたちが焦った。

ただの腹痛だとか必死に誤魔化していたけど、多分怪しまれたままだよ。

それでも「夕飯の準備があるだろ」って、ランガが無理やり話をずらした。そして――

「よし、飯の準備か狩りに行くか決めるぞ」

「またカードゲームでの賭けだ。俺は十までしかないカードの扱いに困って、負けた。」

結果、シャート、クレイバー、ヴァロと俺が、飯の準備係だ。

狩りはこの辺の安全チェックを兼ねた食料探しで、明日以降に食べる分らしい。

御者は一日中運転なので免除だ。それには同意する。

で、こういう場での料理、何を作ればいいのかと思えば、肉を焼く！ だ。

でも、ただ焼くだけは、料理じゃねえよ！

とりあえず宿のトイレに逃げて、スマホで顆粒^{かりゅう}コンソメ、ケチャップとバジルソース、ガーリックペーストとタバスコ、デスソース、酒を（一応な）数本買った。〈容器変換^{ようきへんかん}〉ってボタンが増えていて、ビニールやプラスチックの入れ物がこの世界にあるものに変換されたのはすごく嬉しい！ トイレから戻ると、すでにクレイバーが肉を焼いていた。本気で肉だけなのか聞いたら、パンもあるじゃんって。堅いパンを二本出して、カンカンって叩いたぞ。

昔はそれなりのものを食べたいと、みんなで簡単そうなスープ作りにチャレンジしたこともあるけれど、野菜の皮が残ったり芯が残ったり、味が変わったりでやめたんだと。

料理を作ることにセンスがなさすぎる。詳しく聞いてみると、頑張^{がんば}ったのだろうけど、作り方がすごく大雑把だった。

〈鋼鉄の拳〉と〈新月の雷光〉どっちも似た感じで、宿や食堂で美味しいもの食べるから、仕事中は気にしないんだとさ。

ダンジョンとかに籠^{こも}る時は、弁当や携帯食糧をたくさんマジックバッグに入れていくって。

いくらマジックバッグ内の時間経過が遅くても、弁当は一週間も持たなくない？

弁当を食べ切ったら、干し肉や乾パンもどきと、狩った獲物を焼いて食べてるらしい。

時間経過なしのアイテムボックスはレアであり出回ってないし、Aランクのダンジョン報酬なので入手困難だって聞いてしまった。〈無限収納〉のことは絶対言わないでおこう！

肉は勝手に焼いておいてくれと伝え、仕込んでいた生地を使ってピタパンを鉄板で焼く。

野菜を取り出して生で食べる分と鍋にぶち込む分とに切り分けていく。

「そんなに野菜を出してさ」

「野菜は嫌い」

またか。マジ小学生男子か。調理用食材は、両パーティともほぼパンと肉と塩しか用意してないらしい。俺はそれに付き合うのはごめんだ。

シャートとヴァロの文句は無視して、鍋に顆粒コンソメと、じゃがいもとニンジン、玉ねぎ、キャベツ、カナンの店で買った野菜をぶち込む。

ワインナーの代わりに焼きかけの肉を少し切り分けて鍋に放り込む。適当でいいよな。

コシヨウ瓶を出すと「そんな高いものをこんなに持つてるのか？」とか騒がれそうなので、塩だけ入れて許容範囲内に味を調整する。あとは蓋をして放置。

ピタパンをピザ生地代わりに、トマトソースと焼いた肉、さつき牧場主から貰ったチーズをのせてみた。

「チーズはつまみにしようと思ったのにー」

シャートに文句を言われた。全部は使っていないからいいじゃん。

「この赤いの何!？」

クレイバーもうるさい。大人しく肉を焼いてくれ。

こら、鍋の蓋を取るんじゃない。いちいちツッコむのも面倒なんだぞ。

「野菜まみれなのにいい匂いだぞ」

「味見〜味見〜」

シャートとヴァロとはとにかく野菜が嫌いらしい。でも味見は真っ先にしたいとか……

「まだ火が通ってないからやめろ」

「「えー」」

マジ子供か。

トマトソースとバジルソース、ガーリックペーストは、俺が自分で作ったと言い張れる材料だから選んだ。これでも何か言われそうだけど、塩だけの肉を食べるのは物足りないよなあ？

正直、俺的には品数がもう少し欲しいが、焼いた肉だけよりはだいぶいい。

「いい匂い！ 味見しようよー」

「腹減った。ちよつとだけ！」

「鍋のほうまだかな？」

シャートとヴァロがまだ言っている。クレイバーはスープが気になって仕方ないらしい。

「うるさいぞ」

みんなが揃うまで待てないのか。こいつら、いつも先に食べてる感じなのかな。

準備が終わったのでタバコ吸いたいんだが、ここを離れたらこいつら絶対食べそうだから、離れ

られないぞ。

狩り組は、飯の確保というより、周囲に危険がないと牧場の人たちに安心を与えるのが目的なので、近場を回ってすぐに戻ってきた。それでも小型のイノシシ三頭とオオカミを狩ってきているから、このあたりは、普通の人にしてみればわりと危ない気もする。

「いやあ、もっと狩るつもりだったが、あんまり出てこなかった」

出てこなかったなら、ここの住人たちは安心できていいじゃん。

ランガはすっきりした顔だ。狩りでストレス解消したんだな……

「ベアくらいが欲しかったなあ」

ドレイク……民家の近くでベアとか出てきたら大問題なんだろう？

「いい匂いだな」

「腹減ったー」

ドットとランガの言葉で、みんなの意識が食べる方向に向かったが――

「「……」」

テーブルに並んだピタパンで作ったピザとスープを見て、みんな固まった。

「スープがあるだとい！」

ドットが叫んだ。カナン の宿や食堂ではまともな飯を食べてるはずなのに、ちよつと外に出ただけで、なぜ肉だけの食事に我慢するようになるのか。

獲物の解体とかはできるのに野菜の皮は剥けないとか、意味がわからない。

だって王都まで行かされたら、戻れるまでどれくらいよ。

「ボルクさんにレシピを送って頼んだらいいんじゃないか。というか、そうしろ！」
ランガは自分たちの定宿^{じやうど}で食べられるようにしたいらしい。

「ポルドスに着いたら教えるから、勝手にやってよ」

カナンの商業ギルドはなんか怖かったから、ポルドスの商業ギルドも行きたくない。

「ジェイル……おかわり！」

ヤンが元氣いっぱい言う。いっぱい作ったのにもうほぼない。どれだけ食うんだよ。

ピタパンの生地がなくなりそうだから、仕込みとして新たに生地を作ったら、シャートとヴァ口が調味料の陶器に指を突っ込んで味見しやがった。

「おい！」

「だって使う前の味が気になったんだよー」

「これ臭い!？」

ニンニクは臭いに決まってんだろ。

「これでも味見してろ！」

デスソースをスプーン一杯ずつ口に突っ込んでやった。

「ガアーーーーッアアアア」

「ヴォーエエエエ！ 毒！ 毒!!」

二人は悶絶^{もんぜつ}して地面でバタバタしている。やりすぎたかも。

「つおう？ あれ？ なんか美味しいかも？」

「ギアアアア」

シャートは辛さに強いようで、すぐ立ち直った。ヴァ口は、しばらくのたうちまわった。

「みんなで使うもんに指を入れるからだ」

ドットとランガがドン引きしてるけど、悪い子にはお仕置が必要だぞ。

「やらなくてよかった……」

やる気だったのかよ。ヤン。

まだみんな食べてるけど、俺はもう限界だ。タバコを吸いに離れるぞ。

牧場周りは草原で奥が森なので、景色は「自然だなあ」としか思わない。でも、夜の風と空一面の星空はすばらしいものだ。

「ふー」

休憩ごとに一本は吸ったものの、吸いたい時に吸えないのは辛い。

慌ただしく吸うのは、吸ったっていう気分になるだけで、やっぱりもったいないし、味気ないよな。ここで、ビールかコーヒーを飲んだるのが見つかる、めんどくさいんだろうな。

はあ……《ヘルム》でゆっくりしたい。

早ければ明後日の昼、遅ければ明々後日^{しあさつて}の朝くらいにはポルドスに着くらしい。

早く解放されたいけど、王都行きがなくなるってことは子供が犠牲になったってことだから、そ

れはそれで望ましくないんだよなあ。

さすがに子供がどうにかなったって聞くのは寝覚めが悪いし、可哀想だ。

一番いいのは、早急に子供たちが見つかって、王都までさっさと行って依頼から解放されるってことかな。

三日かそこらでさえ辛いのに、二ヶ月この状況かぁ。夜間にタバコ吸いまくったるか。

……みんなが寝ついたら《ルーム》に行ってもいいかなあ？

誰かが目を覚ました時に俺がいなくて騒ぎになると困るよな。

喉が渴いたので《無限収納》から水かコーヒーをと思ったが、覗きに來られたら面倒だ。

そういうことで……用意したスキットルの残りの二本のうちの一本を取り出す。

「……焼酎か」

残りはウイスキーだったかな。今度詰め直さないと。一口飲んだところで、背後から影が。

「ジェイルウウー、まあだ持ってたのかぁ」

あーあ、やっぱり覗きに來られた。シガリ口を咥えたランガに見つかったよ。

「ああー」

「ひどーい」

ランガの声を聞いたヤンとヴァロもやってきた。

自分の水分補給の酒を飲んでるだけで何が酷いのか、二十五文字以内で答えたまえ。

タバコを咥えたまま、スキットルを持った右手をホールドされて屋内に連れ戻された俺。

「ジェイル！ これ飲ませてくれ」

「ワインの味が忘れられないんだ」

「ヤンだけズルい」

ランガとヤンはともかく、ヴァロよ、カードで勝負して決めたんだからズルいとかないだろ。

「ドット、こいつに酒くれるように頼んでくれよ」

ランガがドットの肩を掴んで必死に頼む。

だから、酒は水の代わりなんだろ。俺から水を取り上げるなって。

「お前ら、そんなに美味しい酒を自分たちだけで飲んだのか」

そうそう、そうなるよな？ 俺のせいじゃないぞ。呆れた顔のドットとバツが悪い顔のランガた

ち……

「このスキットルの酒、嗅いだことない匂いするー」

だからシャート、匂いを嗅ぐなッてば。

「なんの酒だあ？」

あかん、ドットまで。この三十代前後のこいつらは、みんな酒が大好きだった。ドットたちがあんまりタバコには興味を示さなかったからうっかりしてたけど、酒は別だったのかー。

「ジェイル、酒は売るほどあるのか？」

ドットに聞かれる。別にあげてもいいけどさ、ホイホイ出すとか常識知らずとか言われちゃう

生真面目きまじめ そうなドレイクがコップを並べて注いだ。

「俺はいいから。もうクサ吸ってきていい!」
付き合いきれん。

「そっちのスキットルはこつちと違う匂い」

「変わった匂い」

ヤンとヴァロが、俺の手に持っているスキットルをまだ狙ってる。

「あー、うるさいな。もう半分も入ってないんだからいいだろ」

それから二人はランガとドットに絞められて大人しくなった。俺はため息を吐いて外に出た。

タバコの時も結構ウザかったけど、酒もまたうるさいんだな。

地球の酒もタバコもこいつらにとつて、いい匂いで美味すぎだから仕方なし。

こっちの世界はまだタバコ作りも酒造りも発展途上っぽい。原初の味を体験できたと思えばなぜか嬉しいぞ。酒は水が美味しくないダメだろうから、まずは浄水を頑張れ。

「ふー」

うーむ。結局はタバコを吸う時は外ばっかだな。自由ってなんだつけ。

雑な飲み会の場になった屋内はちよつとうるさい。

「うめえ!」

「これまさか神の水か?」

「おい! これは本当にワインなのか?」

逆に、こっちの濃いワインを飲みなれていると、綺麗な飲み口のワインは物足りないんじゃないか……と思えば、そうではないらしい。

九人でボトル二本分はすぐ終わるだろうに、結構長いこと騒いでるなあ。

(……ん?)

ふと、俺の腕から赤いライトが点滅してるのに気がついた。

ウォッチが〈危険察知〉をお知らせしている。

〈MAP〉を開くと、赤い点の場所はかなり遠い。

ここから半日くらいかかるところって、めっちゃ遠い場所をなぜ知らせてくるんだ……反応がかなり大きいな。

詳細がわからないんだが、誰かに報告すべきか。

地図を確認すると、ポルドスの街のほうに近い場所だ。

ドットたちに知らせたら、この範囲でなぜわかるんだとか言われるよなあ。

見て見ぬ振りは寝覚めが悪いことになりそうだし……

はあ……余計なものを作っちゃったかな。スマホだったらポケットに入ればなしで知らんぷりできたのに。

中に戻ると、お酒で幸せ気分なおっさんたちじゃなく……お通夜状態だった。だから言ったのに。